

たまたゆら写真展

高山市制施行70周年記念誌より

令和6年度高山市所蔵美術品展
名もない飛騨の風景に魅せられて。



朝日町／秋神川

稲越功一の写真から。

眼と風の記憶。それはあまりにも脆くて、淡き美しさ。

2025年3月8日(土)⇒30日(日)

午前10時～午後5時 | 休館日 11日◎18日◎25日◎ |

会場 飛騨・世界生活文化センター ミュージアム飛騨内[高山市千島町900-1]

郷土出身
アーティスト
稲越功一 [1941~2009]

主催 高山市
共催 飛騨・世界生活文化センター 指定管理者 飛騨コンソーシアム
T+design 山本純一広告制作所

青年期に書いた稲越さんの手紙を当時、雇い主だった笠根弘二さん(現在 takaya)が持っていた。手紙には「妹の授業参観に出席するため休ませてほしい」と書かれてあった。父を事故で亡くした稲越さんが、家長としての責任をもっていたことはずけるが、休む理由を手紙にしたためるといふ稲越さんのスタイルが、この頃、すでに確立していたことにたいへん驚く。

稲越さんは1970年代初めに写真家としてのスタートを切った。当初、浅井慎平さんと共に(株)モス・アドバタイジングに入った時、稲越さんはデザイナーだった。独立するために飛び立った浅井さんのあと、「写真家になりたい」と稲越さんも辞めた。そして2年後にはもう世間の注目を集める写真家になっていた。

資生堂の「おはようの肌」「素肌美人」など話題作を世に放った稲越さんは、広告写真の世界に長くは留まっていなかった。「男の肖像」「女の肖像」を有名雑誌に連載し「中村吉右衛門」に取り組んだ。だが肖像写真は通過点にすぎなかった。

彼が選んだ次のステージは「紀行写真」だった。芭蕉の「奥の細道」を辿り、中国を訪ね、チベットを訪ね、そしてモンゴルに向かった。そのしんどい旅の途中で、彼は病に蝕まれていた。彼は力を振り絞って東京都写真美術館での大展覧会を準備したが、会場を見ることもなく、途中で逝ってしまった。



脆くて、淡き美しさ

稲越さんがメンバーだったエンジン'01文化戦略会議の会場になった前橋市。その街の風景を撮影した写真集を、稲越さんは手にしていた。

それまでに数回、大きな写真展を高山で開催するたびに稲越さんは告知ポスターや会場構成を僕にまかせてくれたが、この日の打ち合わせはいつもとは違った緊張感が漂っていた。どうやら稲越さんのまなざしをお借りして高山市制施行70周年の記念誌を作るといふ話だ。記念誌の方向性はまったく見えていなくて、その舵取りは僕にまかされていた。

稲越さんと一緒に作る。それだけで浮き足だってしまうのだが、2006年の初夏から「たまゆら」の撮影はスタートした。1回に3泊という時間をかけ、国府、清見、高根、朝日をまわった。

夏過ぎにさらに2回目の撮影。このときは乗鞍に抱かれるように小さなヘリコプターから空撮をした。合計1週間、稲越さんとロケを共にした。稲越さんのまなざしをおすと、名もない風景はポラロイドの中で、柔らかな

空気をまとい、淡く光り輝いていた。人の手が入れば脆く消え去ってしまう、未来への一抹の不安を抱きながら、僕は稲越さんの写真に文を寄せた。

心で視るということ

稲越さんの晩年は自分が歩んできた世界を飛驒の子どもたちと分かち合うことだった。「わたしの好きな高山」と題して、高山市立北小学校の5年生、6年生を対象に、稲越さんは写真コンテストをプロデュースし、そしてご夫妻で審査もされた。毎年、初秋になると奥さんの敬さんと一緒に北小学校を訪れた。子どもたちの作品と対峙する稲越さんの温和な表情には、写真という表現を心底楽しんでるのが感じられた。

その後、稲越さんのご尽力で、なんと六本木ヒルズ森タワーのギャラリーで「わたしの好きな高山」の作品展が開催されたのだ。子どもたちや保護者、先生たちは作品だけではなく、窓から眺める東京の街を楽しんだ。

こうして「たまゆら」と「わたしの好きな高山」に対峙することで、稲越さんが少年期から引きずってきた自分の自分を解放することができたと思っている。

アートディレクター・執筆

山本純一

たまゆら写真展

- 水との交わり [国府地域]
- 生命を宿す [之宮地域]
- 水の記憶 [上宝・奥飛驒温泉郷地域]
- キャベツの意義 [荘川地域]
- 木の聲を聞く [朝日地域]
- きみが微笑むとき [高根地域]
- 樹から生れる [清見地域]
- 縄文的生き方を想う [久々野地域]
- 流れる [高山地域]
- 飛驒びと
- ウォーターフォールと瀧 [丹生川地域]
- 遠い宇宙の記憶



掲載写真・山本純一